三池闘争

発行所
三池炭鉱労働組合
大牟田市不知火町二
電話3033番
編集兼発行人　平島敏治

天の時は地の利に如かず。地の利は人の和に如かず

孟子

杵島闘争は政府の陰謀

踊るのは高取社長

闘う杵島の情勢分析と行方

杵島の同志達は、会社の弾圧と一方的企業整備に抗して、八月二日より労働条件の防衛と、組織防衛のため血みどろな闘いをつづけている。杵島闘争の発端は既に情報や炭労新聞などを通じ大半は理解されているが、この闘争の意義の重大さについてその本質を明らかにし、十分なる理解をなして将来の労働運動に対処せねばならない。そこで三鉱労組の執行委員会では、各支部長及び本部北岡次長の戦術委員会のメンバーを十九日より二十三日まで現地杵島労組に派遣し、その実体の調査と激励を行つた。

杵島炭婦協の歓迎をうける三池の戦術委員の各支部長

なぜ闘争は起つたか

十九、二十日の両日は昼は炭労、九炭労、地闘、現地執行部と懇談会をもち、お互の経験を交流する中から次の戦術を樹立することに協力、夜は七名が七班に別れて主婦会、地域分会との懇談会を深夜まで行い次の五つの点を分析した

第一点として杵島は企闘以来炭労の中でも三池と並び職場闘争が活発に行われ、労働条件が他に比較して良いという宣伝がなされていた組合であつた（吾々の調査の結果部分的には良いものもある、三池とくらべると必ずしも良くないが、会社は一挙に過去において組合が闘い取つた労働条件（金額にして月当り二〇〇〇円―三、〇〇〇円相当額）を切下げて将来の職場闘争を何らかの形で弾圧をしなければならないと絶えず考えていた。

第二点は杵島炭鉱は、高取社長一族で二億円の株を独占していることに対し、金融資本がこれに対して目をつけていた。

第三点は高取社長のワンマンにより技術的な考慮が払われず、出炭計画等においても無計画であり、場当り的であつた。

第四点は職員組合が炭労に加盟しておらず、会社側の意図する職制強化の方向に走り、職組と共闘も組めず、むしろ会社側の立場に加担する態度をとつていたこと（現在職員に対する大衆抗議が行われている）

第五点は長計協定を廃止し、坑内に不必要な人員を労働時間の延長と配転で行なおうとした。

以上の五点を通じていえることは岸反動内閣の一連の労働政策で、国鉄の新潟や日教組の佐賀、自労の大牟田支部に通ずるものがある

問題は経営者の無能

三池の会社幹部をはじめ、各炭鉱の経営者は「杵島のような無暴な闘争をすると会社はツブレル」とさかんにPRをとばし、自社の生産増強の線へ強引に引きずり込もうとしているが、本当に杵島は倒産の前夜にあるかということについては否定することが出来る。

第一に借入金が他社に比較して低い（杵島十億円、貝島三十億円日炭二十二億円、明治三十八億円）また普通なら、借入金によつてまかなわれるはずの大峰炭鉱の廃鉱費用や起業費等も全部自己資金でまかなつている。

第二に杵島商事、花菱商事、住の江海運という会社をつくり杵島炭鉱の石炭販売、輸送、資材購入などをやり高取一族でその利潤を占め、立川炭鉱の株の五十三%をもつている。

第三に切羽整備と社宅新築を行つている。

第四に会社は経営陣の強化を考え住友から技術関係の首脳をよんでいる。

第五に三井、明治、住友をはじめ各社が杵島炭鉱をねらつている

第六に組合はいま以上に炭を出す能力も協力も有している。

など挙げれば全く経営の無能と組合既得権を略奪することのみによつて企業整備をしようとしていることがうかがえる。

長期態勢が必要

組合員及び炭婦協の闘う態度は日を追うにつれ強硬になつて来ている。この態度を分析すると

第一に期末手当から企業整備闘争へと移向しているがこの切り換え時の危険（炭労期闘カンパを打切り、杵島独自の企闘に切換えた）は通り越した。

第二に杵島労組は企闘や職場闘争で成果を挙げているが三池のように血みどろの四十三日、一一三日の闘いが無いので長期闘争のと覚悟を社宅（地域）情宣で徹底を期さねばならない。

第三に倒産前夜という会社宣伝には当初組合員も動揺したが金融資本と個人資本との関係や会社経理のバクロで自信をもつて来ているが学習活動が必要。

第四に行動隊は組織の中核として首切り闘争の経験を生かし十分活動しているが、杵島闘争対策本部、三山執行部、教宣部との連繋が軌道的でないが意識は十分ある。

第五に炭婦協も行動隊同様首切り闘争の経験で自信をもつて闘つている。しかし杵島連合当時のカラーがあつてしつくりいつていない地域もある。

などがあげられるが、この闘いをバック・アップするのは九州炭労であり炭労全山であることはいうまでもない。

一連の弾圧政策

最後に杵島闘争は岸反動内閣とこれに通ずる金融資本が「いわゆる総評と対決する」の現われである

炭労の杵島労組
国鉄の新潟地方本部
教組の佐賀県支部
自労の大牟田支部

いずれも各単産の札つきの組織へ弾圧が強化されている。ということは政府の弱点をはしなくも見せているとみるのは色目だろうか。炭労の三池支部に弾圧が来なかつたのはわれわれの組織がつよいというのはうぬぼれで、敵のまき返しは執拗に迫つている。

いづれにしても杵島の次は三池であり、三池の身替りに杵島が闘いの矢さきに立つているといつてもよい。

前進

杵島闘争の意義

杵島の同志たちはいま血みどろになつて激しい闘いを続けている既に炭労新聞その他によつて内容は報告されているが、この闘いは非常に重要であり、こんどの炭労自体の闘争についても重大なる影響を及ぼすであろうということを考えれば、この本質を明らかにしこれの支援態勢の確立を図らなければならないであろう。

杵島労組は、わが三鉱連の一一三日の企闘直後同じようなケースで大量解雇が発表され、当時三池からの応援も繰出し完全なる首切撤回をさせ、大勝利を喫したのである。

そのご、職場闘争も活発になりあらゆる諸条件の獲得のために闘いを起し、相当な成果を挙げて今日に至つている。しかし会社側は突然大量配置転換と労働条件切下げ、標準作業量の引上げなどこれら一連の企業整備案を組合に提示し、組合はこれと対決し数回に亘る団体交渉を行つてついに決裂し、八月二日より期末手当の到達闘争のための無期限ストに入つたそのご期末手当の到達闘争よりもむしろ企業整備反対闘争へと変化したので炭労中闘は八月八日より企業整備反対闘争にこれを切替え現在に至つている。

この闘争の本質は明らかに政府の労働者弾圧の政策と、この政策を遂行せしめる資本家側の憑らつなる意思によつて、金融独占資本を利用し一切の融資ストップという挙に出てきたわけである。これは現在の私企業の中で自己資金のみをもつて運営している会社というものは非常に少いという現状の中から、金融ストップによつて労働条件を切下げ、強いといわれる職場闘争の圧力をこの際一挙に押し切ろうという魂胆があるのである。この政策は国鉄労組における弾圧と同一性格をもつものであると理解すべきであろう。民間産業で最も強いといわれておつた炭労の中で、三池と並んで職場闘争が活発に行われているという位で、杵島は炭労内においても精強組合といわれておつたものである。

経営者の無能力と技術の不美味さからくる問題を、これに対する改善方策を考える前にこの問題を理由として組合弾圧の挙に出てきたわけである。この闘争に対しても仮に、杵島が惨敗を喫するというようなことがあつたならば恐らく杵島の組合はこんど再び立上ることができぬような後退をするであろう。したがつて、杵島がそのような状態になるということは、つぎつぎにねらい撃ちし炭労自体の崩壊をねらつているものと解釈すべきであろう。このような重要なる要素を帯びている杵島闘争を成功させるためには、まず、炭労が一致結束してこの闘争を炭労自体のものとして取上げ、炭労の組織の運命をかけて対決するという覚悟をしなければならないであろう。

九炭労においては来る九月四日には、現地の大町町において臨時大会を開催し、杵島闘争支援についてのあらゆる討議を交し、万全の態勢を整えることになつているわれわれはこの大会を通じて全炭労の従来の闘争の経験を生かし、最後まで闘い抜く決意を固め会社側の野望の粉砕と既得権を防衛し勝利を収むることによつてのみ炭労の組織を前進させるということを確信する。

国鉄 新潟闘争に学ぶ

権利闘争は妥協のない闘争

本年度最高の力を発揮し、国家権力と対抗して、労働基本権を守るため徹底して闘つた国鉄新潟地方本部の職場闘争はかつて三池が四三日の闘いをなし闘つた到達闘争や、いま既得権の防衛で闘つている杵島闘争に通ずるものがあるので、八月十二、三の両日新潟県村上市で行われた「国鉄新潟闘争討論集会」の中から機関紙通信者（KNA）を通じ取材した。

×

相田国鉄新潟地本委員長の闘争経過を分析した報告の中「新潟闘争の意義」と「組合員の力はどこから生れたか」の部分を紹介する。

国鐵新潟闘争の意義

新潟闘争は敗北であつた、という見地からなさねばならぬ。

見界がある。敗北か否かは、次の

この闘争は権利闘争である。権利闘争とは妥協のない闘争だ。妥協がなく、しかも決戦でないとするならば、今闘われる個々の闘争が今後の闘争発展にいかに寄与するか、いかに基礎をつくつたか。このような見地からみたとき、

(1)直接のネライはないにせよ、岸ファッショ内閣をふるいあがらせた。といえると思う。これによつて、岸の超反動的弾圧的性格が完全にバクロされてしまつた。また、このことは、労働者階級が今後闘う上で戦術上の貴重な教訓をのこした。ということでありあの偉大な行動が結果として生んだものである。

(2)スト権を無視していくまでを極めて明瞭に示した。スト権が官公労働者の生活と権利を守る道とすれば、スト権の奪還は重大な当面の日本労働運動の課題である。全国大会できめ、今日すでに提起されている現実の課題に対し、最初に闘われた闘争であり、その経験はやはり貴重である。そして、事実、スト権を与えよ、の与論を大きく前進させ、現実の課題にのせている。

(3)労働者階級の社会的地位をはつきり示した。その統一と団結の力をイカンなく発揮した。汽車が止る、与論の重圧が加わる。しかもこれが加重されればされるほどの敵が動揺している、このために言論機関がゆり動かされている。与論を喚起することによつて、われわれの闘争が有利になる、という本質的な面を見のがしてはならないと思う。新潟の闘争が十五―十六日でてつてい的な弾圧を受けたとき、しかしもう二―三日闘えば、この同じ与論の反撃が、相当程度敵に向く目であるという本質的関係である。労働者の果す社会的役割が断乎とした統一行動の中ではつきり認識されるに至るや保守政党のやり方とますます批判の目がそそがれる結果になるのである。だからといつて与論を考慮しないというのではない与論をかくとくする原理は、社会の中で果すわれわれの地位を示すことである。

(4)少しうぬぼれたようないい方になるが、全労働者階級に「新潟を出発点として十月闘争を決意をもつて闘わなければならぬ」ということを植えつけていることである。全国へのオルグの中で全国の職場の労働者は「新潟のように闘うにはどうすればよいのか」「いい点も悪い点も新潟から学ぼう」等が真剣な討論の課題となり、また実際に討議されつつある。

(5)国家権力の果している役割を労働者階級がハツキリ認識したこと、国家権力、とくに警察権力にたいして毅然として闘つた。例えば検事者の毅然たる闘いにたいして中野県警本部長は「神武以来の犯人をブタ箱にたたきこんでしまつた」となげいていた。国家権力が一たび労働運動の中に介入するや、労働者のいかりがどんなに激しく爆発するものであるかを、こんどほど示したものはなかつた。

以上のようにみてくると、権利闘争での成果と欠陥の見方は、今後の闘いにおいて、組合の統一と団結が、いかに保証されるかにかかつており、これが保証され、つよまつている限り、絶対に敗北でないということを強調したい。

組合員の力はどこから生れたか

では一体この組合員の力はどこから生れてきたか。

第一に、これらの闘争の生れた力は、職場闘争を地道に築いてきたというところにある。定員法・レッドパージ以降の苦しい時代を末端から職制と対決し、職制権力をマヒさせる闘いをつづけてきた力が第一である。

第二に、職場活動家の献身的な活動が、あの闘いのカナメになつていた。

第三に、職場活動家と支部―地本の幹部が十分に統一していた。

第四に、微温的だつたが、職場の中から地道に続けられておつた学習による闘いを支える職場の思想性と政治性が堅持されたこと。

要するに、闘いの中で、労働者階級が自信をもつた。一斉にスタートしたのではなかつたが、闘いの中で闘いに立ち、連帯性を深め、自信をもつたことである。このことはもはや消すことのできぬ経験として今後の闘いの源泉となるであろう。